

共に考える 住宅デザイン

〇114〇

甲斐 徹郎

豊かさを引き継ぐ

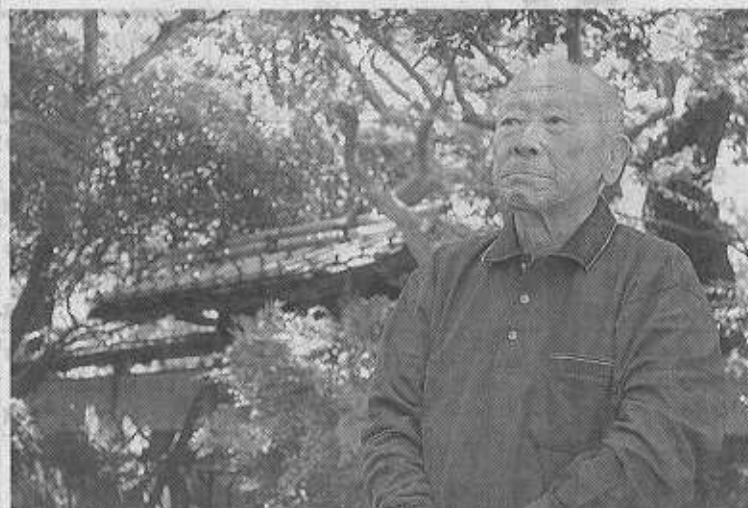
筆者が企画コーディネートを手掛けた環境共生型コーポラティブ住宅「経堂の杜」「櫛ハウス」について以前にご紹介しましたが、今回は、現在計画が進行中の、東京都大田区山王でのプロジェクトについて、計画地の地主さんのエピソードを中心にお話したいと思います。

計画地の大田区山王は、明治初頭から別荘地として拓けたところで、お屋敷町として有名な地域です。ひとつひとつの家の庭園が緑豊かな街並みをつくり、そうした環境がつい最近まで守られてきました。

しかし、そうした豊かな環境は、相続税などを理由に売り払われると、細分化されて小さな戸建住宅になったり、大きなマンションが建てられ、それまで街に当たりまえにあった緑が、ひとつ、またひとつ、姿を消し、様変わりしつつあります。

この計画地の地主さん

広がる環境との共生



計画地の庭にたたむ西澤さん

育まれた自然活かす

先代から山王の地に居をた。すべての提案を断り構えられ、七十年以上に続けながら、「環境を残します。現在ある庭はしたい」と言っているのは、もしかしたら自分たちのエゴでしかないのかもしれない、と悩んでいる古い庭です。

は、八十八歳になられるお父様と、娘さんです。

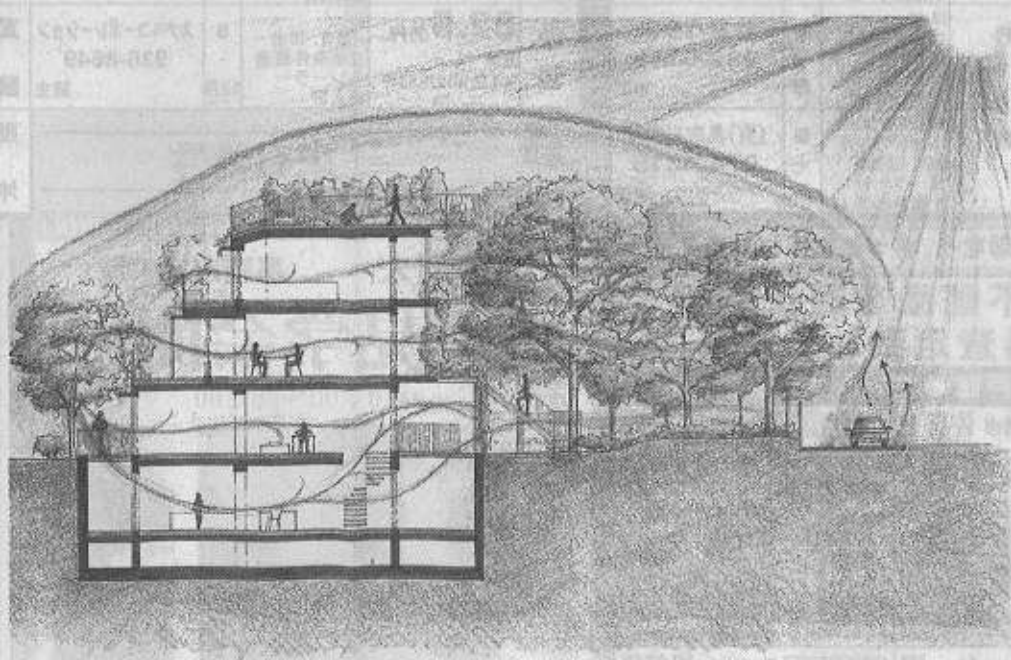
お父様は、このまま相続が発生すれば確実に今ある庭の部分は切り売りせざるを得ないと判断し、娘さんに相続税対策を託しました。

お父様は、このまま相続が発生すれば確実に今ある庭の部分は切り売りせざるを得ないと判断し、娘さんに相続税対策を託しました。

一方、娘さんには、いろいろな業者から相続税対策としての土地活用提案がありましたが、どれも収益を優先させたもので、この豊かな環境が残らないのはかりでし

たときに、前述の世田谷にこの土地に住もうとしたい人たちは、自分たちが共生型コーポラティブ住宅の生活を豊かにするため、今回に進んでこの古い庭園に計画を選択することになりました。

その選択のポイントは二つです。ひとつは、この土地の環境を最大限活用して建てられる新たな建物と地主さんの家とは並びあって、豊かな日本庭園を互いに自分たちの土地活用を行うため、新庭として享受し合うこと



明治から受け継がれてきた庭園を最大限に活かした計画が進行中

(マーケティング・コンサルタント)